大分合同新聞社

浜風のまち

佐賀関そぞろ歩き

第 3 回

初版発行：2011 年 4 月 29 日

施餓鬼舟
盆に死者の魂を弔う

2009年
8月13日掲載

死者の魂を弔う大分市佐賀関の「施餓鬼舟（せがきぶね）」。盆に、小舟に野菜や短冊を飾り付け、この1年に亡くなった地区の人を供養する。

３０年ほど前までは、送り火として沖で舟に火を付けて流した。いまは飾りだけを港で燃やす形で受け継がれている。

田中公民館では、藤沢弘さん（78）、渡辺修さん（72）、徳永常夫さん（69）が供養祭りの準備を始めていた。舟の大きさや材質は地区ごとで異なるという。

田中地区は毎年15日朝に飾り付けをする。舟は長さ2・5メートル、幅1メートル。「あの人は舟の綱取りがうまかった」とナスを乗組員に見立てて飾り、「あの人はかじ取りがうまかった」と船頭に見立てたカボチャを飾る。いかりはクロメで作り、模造紙に「西方丸」と書いた帆を掲げる。

「時代は変わったが、盆の行事は変わらず、住民のきずなを深めている」と藤沢さん。伝統行事を後世に残そうと、自治委員らは２００８年、準備の方法や飾りについてまとめた手引書を作った。

（地域報道部・永冨希望）

「地区の伝統を大切にしていきたい」と（左から）渡辺修さん、藤沢弘さん、徳永常夫さん

一尺屋（いっしゃくや）の鯨墓 漁港を見守る２基

２００９年８月15日掲載

大分市一尺屋の上浦漁港。船を見守るように、２基の墓石が建っている。地元の偉人の墓だろうかとよく見ると「鯨」の文字が刻まれていた。

海岸に打ち上がった鯨を供養するために、大きな方は１８５５（安政２）年、隣のもう１基は１８８８（明治21）年に住民が建てた。

「この鯨には法名があるんです」と、郷土史を研究している高橋末彦さん（73）＝一尺屋・顔写真。明治時代に供養した鯨には「皆成」という法名を付けたと、地区の教尊寺の支坊に記録がある。

当時は海岸の近くでも小魚が豊富で、魚を追った鯨が海岸に打ち上がることがあった。住民は鯨の肉を貴重な食料にした上に、稲作に使う虫よけとして脂を搾り出していたという。

漁港に沖からの穏やかな風が吹き抜けた。鯨たちが海の安全を祈っているような気がした。

（地域報道部・永冨希望）

海岸に打ち上がった鯨を供養するために建てられた２基の鯨墓＝大分市一尺屋

■オオイタデジタルブックとは

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「浜風のまち」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別 府 大 学

デジタル版「浜風のまち～佐賀関そぞろ歩き」 第 3 回

編集　大分合同新聞社
初出掲載媒体　大分合同新聞（2009 年 7 月 10 日～ 2010 年 4 月 28 日）

《デジタル版》
2011 年 4 月 29 日初版発行
編集　大分合同新聞社
制作　別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部／川村研究室
発行　NAN-NAN 事務局
（〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 企画調査部内）

© 大分合同新聞社

●デジタル版「浜風のまち～佐賀関そぞろ歩き」について

「浜風のまち」は、大分合同新聞社が 2009 年 7 月から翌 2010 年 4 月まで、同紙朝刊に掲載した連載記事。今回、デジタルブックとして再構成し、公開する。登場人物の年齢をはじめ文中の記述内容は、新聞連載時のもの。

2011 年 4 月 15 日　NAN-NAN 事務局